

『あなたの国籍はどこにありますか？』 '20/06/28(ライブ礼拝) 聖書箇所:ピリピ人への手紙 3章 17-21節(新約 p.386-)

いよいよ、来週からは、礼拝が再開されます！ただし、来週からの礼拝は、二部制になりますので、どうぞ、礼拝の時間をお間違いの無いように、お気を付けてください。…さあ！それでは、ライブ配信だけの礼拝は、一旦、今日が最後になります。精一杯の感謝を込めて、今日の礼拝を、神様にお捧げいたしましょう！

<メッセージ>

先週と、その少し前(6/7)の礼拝で、私たちは、「クリスチャンとして成長していかないといけない！」ということを学びました。良いですか、皆さん？パウロたちは、自分たちが真の神様を知って、救われただけでは決して満足をしませんでした…。いえ、むしろ、救われたからこそ、パウロは、真の神様のことについて…、また、霊的なことに関する関心が高まったと言うのです！

イエス様が教えてくださったように、私たちクリスチャンたちは皆、地の塩…、世の光として、天の神様が、それぞれの地に遣わしてくださったのです。「遣わされた」というからには、もちろん、遣わされた方の願い…、目的があります。だから、イエス様は、**マタイ 5:16** で、**こう教えてくださったのです、『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』**って…。⇒天の神様は、私たちクリスチャンたちが、神の栄光を反射させる…、まるで鏡のような存在として、良い証しをしていくことを願っておられるのです。

命題: 本当に救われたクリスチャンが持つべき目線とは？

そこで、今日、皆さんとご一緒に学んでいきたい聖書のみことばは、**ピリピ 3:17-21** です。この**3:20**には、**『私たちの国籍は天にあります。』**という有名な言葉があります。このみことばが教えてくれているのは、実は、すべてのクリスチャンたちは皆…、1人残らず、この地上ではなく、天に国籍を持つ、言わば…、「天国民(てんごくみん)」である！ということなのです。確かに、私たちが、いろんなみことばから学んでいます通り、救われている者は、確実に天国に行くことが約束されています。そこに行けば、何の苦しみも、問題も、罪も、悲しみも、病も、ケガも、老いていくことさえありません。だから、多くの人は、天国を待ち望むのでしょうか…。

しかし、今日のみことばが、同時に教えてくれていることは、「もし、私たちが、本当に、真の神様を知って救われているのなら…、神様によって変えられているのなら…、天国に行かなくても、今もう既に、天に国籍を持つ者として、つまり、天国民としての歩みをしているはずだ！」ということなのです。どうぞ、今日は、このみことばから、私たち天国民のなすべき歩み…、特に、クリスチャンたちが持つべき「目線」というべきものについて学んでいきたいと思えます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日の箇所であるピリピ 3:17-21をお開きください。そこには、こう記されています。

17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来まし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。

19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、

私たちは待ち望んでいます。

21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

I. 向上を目指している者にこそ、目を留める！(17節)

クリスチャンが持つべき目線として、今日のみことばが私たちに教えてくれていること…、その**第1番目**は、**向上を目指している者にこそ、目を留める！**ということです。そのことが17節に書かれています。

●目を留めるべきクリスチャンの「選別」

ここ17節では、その少し前の13節と同様…、パウロは、『兄弟たち…』という呼びかけをしています…。

日本語訳では、ここ17節と13節とは若干違うように翻訳されていますが、原語では、全く同じ言葉・同じ表現(ἀδελφοί)が使われています。実は、この『兄弟』という言葉は、「共通」を意味する接頭語と、「子宮、胎」などを意味する言葉(δελφύς)とが合わさった合成語で、「兄弟という意味以外にも、近くに住む隣人や同僚、また、同じ使命を与えられた同胞など」を指す場合にも使われる言葉なのです…。

しかし、では何故、パウロは、ここ17節後半で、「兄弟たちに、目を留めてください」とは言わずに…、**わざわざ、『あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たち…』**というような、長々しい表現を使ったのでしょうか？⇒それは…、少し言いにくいことなのですが…、同じクリスチャンと言われる者の中でも、間違った者たちが居たからです！少し前のピリピ 3章の前半でパウロが触れていますように、この当時、パウロが、『**犬、悪い働き人、肉体だけの割礼の者**』(ピリピ 3:2)などと呼んで、厳しく非難したように…、同じ聖書の教えを信奉し、同じイエス様を信仰しているように見えても…、そこには、大きく間違った理解を持っている者たちが多数居たのです！

パウロは教えてくれました、「彼らは、肉体だけの割礼の者であり…、私たちの方こそ、真の割礼を受けた者である！」って…。言い換えれば、偽クリスチャンのことです。残念ながら、私たちの周りには、**悪意の有る無しは別として…、本当には救われていない偽クリスチャン…、あるいは、自称クリスチャンとも言える者たちが居るのです！**だから、パウロは、彼らのことを激しく非難したのです。

では…、私たちは、どうしたら良いのでしょうか？⇒今日のみことばが私たちに教えてくれていることは、ただ単に、信仰を告白しているクリスチャンなら誰でも良いということではなく…、パウロのように、上を目指して熱心に歩んでいるクリスチャン…、あるいは、そういったクリスチャンに倣って歩んでいる者たちにこそ、目を向けなさい！ということなのです…。

確かに、私たちに必要なのは、クリスチャン同士の励ましです…。しかし、それは、ただ単に、信仰を告白した者同士と一緒に居れば、それだけで良い、ということでは決してありません…。クリスチャン同士が、一緒に集まって、食事をしたり…、時間を過ごしたりすることが、それすなわち、“交わり”なのではありません。だって、クリスチャン同士と一緒に居ても、ひょっとしたら、それはただ、愚にもつかないような噂話をしていただけかも知れません…。あるいは、お互いに愚痴をこぼして、悪口を言っているだけの…、ひょっとしたら、一緒に居ない方が良いかも知れないような集まりかも知れないじゃないですか。そうでしょ？

パウロが教えてくれているのは…、「成長を目指して…、神様に喜ばれようとして懸命に生きていこうとしている…、そんなクリスチャンにこそ、目を向けなさい…、**そんなクリスチャンたちとの交わりを大切にしていきなさい！**」ということなのです。

何故なら、私たち人間は皆、それがクリスチャンであろうと、なかりと…、周りのものから少なからず影響を受ける者だからです。皆さんもそうですよね？ですから、箴言 27:17 でも、こう教えられています、『鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる。』って…。もしも、皆さんが心から、霊的に成長されることを願われるなら…、皆さんは、自分が交わるべき友人を選ぶべきです。 そうじゃないでしょうか？…例えば、それと同じようなことが、ピリピ 4:8 でも教えられています、『…すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。』って…。

果たして、皆さんは、自分が交わるべき相手を考えて、そのための時間を取っておられるでしょうか？自分が目を向けるべき相手…、自分がお手本とすべき方を見定めて…、そこから何かを学び取ろうとしていらっしゃるでしょうか？

●「自分自身が模範となっていく！」ことの必要性

今日のみことばの 17 節で、パウロは、『私を見ならう者になっください。』と言い切っています。このパウロは、他の個所で、「自分は、未だ完全ではない…」と言いつつも、自分の生きる姿勢から学び取って欲しいからです。私たちはどうでしょうか？「私などはまだまだ…」私を見たらダメです。他の人を見てください。神様だけを模範としてください…。」などと言って、自分が正しく生きていなければならないことから…、自分自身がなすべき証しから逃げてしまっていないでしょうか？

ここ 17 節で、パウロは、自分のことだけではなく…、ピリピに居て、向上を目指して歩もうとしているクリスチャンたちに対しても目を留めるように…、彼らをも模範とすべきである、ということ話を話してくれています。それはつまり、パウロのような一部の教師だけが、他の者の模範となれるというのではなく…、当時、ピリピにも複数の模範的なクリスチャンたちがいたからです！私たちは皆、ある程度、立派に成長しているけれど…、逆に、そうないかいないといけないのです！

皆さんも、よくご存知のように、イエス様は何とおっしゃって、天に昇っていかれたでしょうか？マタイ 28:18b-20、『18 …「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。 19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、 20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ、わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』⇒このように、イエス様は、自分を信じて、従っていこうとする者たちが皆、世界中に出て行って…、弟子を作っていくことを命じておられます。そこには、教師であるとか…、与えられた賜物がどうであるとか…、信仰歴が長いとか短いなどの条件は一切書かれてありません。すべてのクリスチャンたちが向上を目指して…、また、本来ならば、先に救われた者たちが、その模範となっていくべきことを教えてくれているのです。そうでしょ？

II. 地上の**ことばかりに目を奪われすぎない！**（18-19 節）

クリスチャンが持つべき目線…、その第2番目は、地上のことばかりに目を奪われすぎない！ということなんです。今度は、そのことを確認していきたいと思えます。もう一度、今日のみことばの内、18-19 節の部分をご覧ください。

18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。

19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

●『十字架の敵として歩んでいる』者たちの特徴とは？

ここ 18 節に、『多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。…』とあります。それに続く 19 節 a で、『彼らの最後は滅びです。…』とある通りに、彼らが救われていない者たちであることは明白です…。続く 19 節で、パウロは、その、『十字架の敵として歩んでいる』者たちの特徴を、3つ挙げてくれています。

①自分たちの欲望に従っている（＝振り回されている）

①その1番目、『彼らの神は彼らの欲望…』（ピリピ 3:19）とあります。つまり、その者たちの従っている相手のことです。彼らは、自分たちの欲望に従っているのです…。いや、振り回されている、と言った方が正しいでしょうか…。つい最近、文春にスクープされた、お笑い芸人（アンジャッシュ・渡部健）がおりますが、一体どうして、彼は、あんなにもキレイな奥さんが居て…、子どもが居て、タレントとしても、安定した地位を手に入れて、あんなにも大それた…、淫らなことをしてしまったのか？…恐らくは、自分自身の欲望を制することができずに、行くところまで行ってしまったのではないのでしょうか？いいえ、彼だけではありません。真の神様を知らない人たちは皆、程度の差こそあれ、自分自身の欲望のとりこになってしまっているのです！

それに対して、私たちクリスチャンは、自分たちの神様を、すべてを造られた真の神様であるということ信じ…、それを受け入れました。それ以降、私たちの主人…、自分たちが従うべき相手は、その真の神様だけとなったのです。そうでしょ？ローマ 6:16-18 では、こう教えられています。『16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。』

⇒みことばは、私たち人間が何かしらの奴隷であって…、真の神様に仕えるか、あるいは、罪に仕えるかのどちらかである、ということを教えてくれています。かつての私たちも皆、以前は、罪に従い…、罪の奴隷となり下がっていました。しかし、神様が私たちを変えてくださったのです！そのことの転機を、今程の聖書箇所では、『もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従した』（ローマ 6:17）ことによって、変えられたということを見せてくれています…。

皆さんも、そうだったのではないのでしょうか？それが、クリスチャンホームであろうと…、未信者の家庭であろうと同じです。ここにおられる皆さんも、ある時に、聖書の教えを耳にされて、その教えに服従されることを、心に定められたはずなんです。ここでは、そういうことについて言われているのです。私たちクリスチャンの神…、私たちが従うべきお方は、真唯一の神様だけです…。だから、私たちは、その神様のお言葉であり、その神様のみこころである、みことばを学んでは、「それに従おう、みことばに従っていきいたい！」という風に考えるのです…。

しかし、クリスチャンでない方たちの『基準』…、彼らの主人は、真の神様ではありません。彼らの基準、彼らの1番の主人は、『彼ら（自身）の欲望』なのです。そうではないでしょうか？私たちが、未信の方々々に伝道すると、その人たちの一部は、ある程度、納得してくれる場合があります。しかし、だからと言って、その人たちが皆、信仰を持ってくれるかと言うと、ほとんどの場合は、そうではありません。彼らにとっては、自分自身が基準なのです。もっと言うと、「自分が何をしたいか…」というような、自分自身の欲望が1番の基準となってしまっているのです。少し前の礼拝で学んだみことばも、それと同じことを教えてくれました。彼らは、結局は、したいことがあるのです…。だから、真理を受け入れたくないし、真理を知りたくも、探求したくもないのです。…と言うのは、真理というものが、彼らにとっては都合が悪いから…。

その人たちが、自分自身の罪を認め…、その罪と決別させてくださる真の神様を信じ、その神様を受け入れる以外に、救いはありません。何故なら、それ以外に、私たちが罪との強い関係を絶ち切る方法

がないからです…。使徒 4:12 でも、『この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。』とある通りです。神様が、私たちに与えてくださった救いの方法は、私たちの救い主であられるイエス・キリストを信じ受け入れることだけです。何故なら、このイエス様以外には、誰一人、罪に勝利されたお方など居ないからです！その証拠に、私たち人間が、どんなに頑張ったところで…、決して、罪に対しては勝利できないじゃないですか！このイエス様だけが、唯一、罪と死に対して、完全に勝利してくださったお方なのです…。その証拠が、十字架の死後、イエス様が約束通り、3日目によみがってくださったことです！だから、私たちが救われるためには、このイエス様を信じる以外に、方法は無いのです…。

②彼らの栄光は幻で…、実は、彼ら自身の恥を表わしている。

②2番目の特徴として…、『彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです…』(ピリピ 3:19)とあります。これは、一体、どういうことなのでしょう？⇒実は、聖書は、「そもそも、私たち人間には本当の栄光などない…」ということを教えてくれています。何故なら、私たち人間は、『生まれながら御怒りを受けるべき…』(エペソ 2:3) 存在であったからです。

あの有名な、イザヤ 43:7 で、『わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。』と教えられているように、そもそも…、栄光というのは、神様のためにあると言っても過言ではありません。今読んだ箇所少し前、イザヤ 42:8 には、『わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。』という厳しい言葉が書かれています…。

だから、聖書には、『虚栄』などという言葉が何度か出てきます。例えば、ピリピ 2:3 をご覧ください、『何事でも自己中心や“虚栄”からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。』とあります。私たち人間は、多くの場合、自分の栄光を求めます…。人から評価されることを願い…、あわよくば、人から称賛されることを期待します…。しかし、みことばは教えます、「それは虚栄(=偽りの栄光)であり、本物の栄光ではない！」って…。

当然、私たちクリスチャンにも同じような誘惑があります。しかし、私たちクリスチャンは、本当なら、自分が如何なる栄光をも受けるべき存在ではないということを知っています。例え…、私たちが何かの称賛を受けられるようなことになり得たとしても、私たちクリスチャンは、そのすべてが、神様からの恵みであり…、神様の御導きであることを知っています…。そうでしょ？

しかし、私たち人間の内に潜む罪は、自分自身の栄光を求めようとします。しかし、神様によって救われたクリスチャンは、そうではありません。ちょっと、皆さん。ガラテヤ 5 章をご覧ください。ガラテヤ 5:22-26、『22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまな情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。26 互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることをないようにしましょう。』⇒ここガラテヤ 5 章では、御霊に導かれた生き方と、肉に従う生き方とが対比されています…。しかし、聖書のみことばは、私たちクリスチャンが、自分の肉(=罪)を様々な欲望と共に、十字架につけてしまったので…、私たちクリスチャンたちは、虚栄つまり、偽りの栄光を求めないはずである、ということを知っています。

ですから…、今日のみことばの 19 節で言われている、『彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。』とは、実は、彼らの思っている栄光とは、本物の栄光ではなく…、単なる幻であり…、その実は、彼ら自身の恥を表わしている…とすることができると言えます。私たち人間には、誇れるような立派な栄光など無いので

す。だから、ローマ 6:4 でも、『おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。』と教えられてあるわけです。

③その眼差しは、地上のことだけに向けられている。

③『十字架の敵として歩んでいる』者たちの特徴の3つ目…、それは、彼らの眼差しが、地上のことだけに向けられているということです。これは、3つの特徴の内、1番、その理由が納得しやすいと思われる。救われていない者たちは、天が存在することを知らないからです。だから、彼らの関心は、今現在の地上のことだけにしか向けることができないのです。それは、当然ですよ…。

しかし、私たちクリスチャンは、そうではありません！本当に救われたクリスチャンは、聖書の教えが真実であり…、自分が確実に天に行けることを確信しています。その人が、本当に救われているのなら！だから、本物のクリスチャンたちは、この地上でのことばかりに、目を奪われはしないのです！

皆さん…、これらが永遠の滅びに向かってしまっている方たちの目線です…。彼らは、欲望に関心が行ってしまっています…。関心が行ってしまっているところか、欲望そのものが神であり、欲望が第一基準なのです。「自分がどう思うか…、自分がどうしたいか…、自分が何を信じたいのか…」そういったことが基準なのです。悲しいことに、そういった人たちは、真理でさえ、自分で判断できると考えます…。2つ目に、彼らは自分たちが栄光を受けることを目的に生きています。自分たちが称賛を受け…、自分たちが良いものを受け取るため…、自分たちの生活が良くなるために生きていて、と言えるのかも知れません。3つ目に、彼らの思いは地上のことばかりに向いてしまっています。何故なら、天を知らないからです…。

しかし、問題は私たちクリスチャンです。私たちは…、いえ、あなたは、自分自身の欲望に振り回されてしまっていないでしょうか？確かに、かつての私たちは、そのような者であったかも知れません…。しかし、救われた後、私たちの神は、あのイエス様だけのはずですよ。じゃあ、果たして、私たちの基準は…、私たちの生き方は、「イエス様こそが、私の主人である！」ということをサポートしているでしょうか？

また、私たちは、この地上で評価され…、この地上での待遇が良くなることを望んでしまっていないでしょうか？ヤコブ 4:2-3 に、『2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。』とあります。また、1テモテ 6:7-10 にも、こう教えられています。『7 私たちは何一つこの世に持って来なかつたし、また何一つ持って出ることでもできません。8 衣食があれば、それで満足すべきです。9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲にと陥ります。10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。』⇒私たちは、ひよっとしたら、この世で、金持ちになることを願ったりしてはいないでしょうか？あるいは、今以上に、贅沢に暮らせることを願うようなものではないでしょうか？

最後に、私たちの目線は、天を向いているでしょうか？確かに、私たちは、この地上で生まれ…、今も、この地上に遣わされています。しかし、私たちの目線は、あくまでも、最終的には、私たちが行くべき天を向いているはずなのではないでしょうか？それらを1つ1つ、私たちは考えていくべきなのです…。

Ⅲ・神様から与えられる 報い に目を向ける！(20-21 節)

最後、第3番目のポイントは、神様から与えられるはずの報いに目を向ける、ということです。そのことが、20-21 節で教えられています。そこには、こうあります。

20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

●クリスチャンに与えられた大きな希望①＝イエス様のお迎え

ここ 20 節と 21 節には、それぞれ、将来、神様から与えられる報い、恵みについて教えられています。ここ 20 節に、『けれども、私たちの国籍は天にあります。…』とあります。『けれども…』とあるのは、それまでの話との対比です。一般の者たちとは違い、クリスチャンにだけは天の国籍が与えられている、という話です。それに続く、『私たちの国籍は天にあります。』という、この表現は、当時のピリピ教会には、最も分かりやすい表現でした。…と言うのも、この当時、ピリピの町は、ローマ帝国の中でも、特に栄誉ある植民都市とされていたからです。今で言うギリシヤにある、このピリピという町は、歴史的な背景もあって…、特別に、このピリピの町の住民には、ローマの市民権が与えられていたのです。ですから、この当時、ピリピの住民であった教会のメンバーたちは皆、この表現がよく分かったのです…。

この当時、ピリピにあって、ローマの市民権を持っていた一般人たちは皆、ローマ市民としての誇りを持って生きていました…。当時、ピリピの町では、ローマの法律が適用され…、皆、ローマ風の服を着て…、ローマ風の道徳や文化が守られ、人々はローマの公用語であったラテン語を話していたのです…。

ですから、パウロがここで言わんとしていることは、ローマの市民権を持っている人たちがローマ人としての生き方をしていたのと同じように…、神様によって救われて、天での国籍を与えられたクリスチャンも皆、天国民としての生き方を送っていきなさい！ということなのです。だから、パウロも、ここピリピ 1:27 で、『ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい！…』というように教えたのです。実は、ここで、「生活する」と訳されてあるギリシヤ語の言葉 (πολιτεύμαι) は、今日のみことばに出てくる『国籍』という言葉 (πολιτεύμα) と同じ言葉と言うか、その同じ言葉の動詞形なのです。…これは、言い換えれば、救われた者らしい生活を…、天に国籍を持ったクリスチャンらしい生き方を生きていきなさい！ということだったはずなのです。

私たちは、いかがでしょうか？ 当時のローマ人たちが、ピリピの町にあって、ローマの法律を守ったように…、私たちも、この地上にあっては、天の神様が教えてくださった、神の法律を守っているでしょうか？ 私たちは、例え、日本の法律を守っていたとしても…、神様の前にあっては、神様の法律でもって、裁かれるのです…。

いつかは分かりませんが、私たちの主であられるイエス様は、必ず、私たちを迎えに来てくださいます。イエス様にお会いする、その時…、私たちは、この地上での生活を終え…、また、この地上での歩みを、神様の前に精算されるのです。その時が、必ず、やってくるのです！

●クリスチャンに与えられた大きな希望②＝罪のからだからの解放

クリスチャンに与えられたもう1つの大きな希望…、それは、罪のからだからの解放です…。例えば、ローマ 7:18-24 にこうありました。『18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいますが、23 私のからだ

の中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。』

⇒ここで、パウロは、自分の内に悪の性質が宿っている…ということをおっしゃっています。それが、24 節の、「誰が、この死のからだから、私を救い出してくださいませんか？」という言葉です。このように、私たちのからだとは、決して、切っても切れない関係で結ばれているのです…。

ですから、私たちが、罪の支配や影響から完全に逃れるためには、何よりもまず、このからだから解放される必要があります…。それこそが、この罪のからだを、イエス様と同じ栄光のからだに変えられるということなのです。イエス様は、そのことを、『万物をご自身に従わせることのできる御力』という、全能の御力によって、なして下さいます。だから、私たちクリスチャンは皆、イエス様にお会いできる、その時を心待ちにしているのです…。

じゃあ、果たして、あなたはいかがでしょうか？…もしも、今日、イエス様の再臨があって、「今日、この地上での人生が終わる…」となった時、あなたは、「ちょっと待ってください！」と言われませんか？ マタイ 25 章で、イエス様は、この世の終わりということに関連して、本当に救われている者たちと、そうではない者たちとの違いを、3つの例えを使って、説明してくださいました。皆さん、覚えてくださっていますか？ ①賢い娘たちと愚かな娘たち、②タラントを預かったしもべたち、③兄弟愛を実践していた者たちと、そうではなかった者たち…。それらを、簡単に一言で言うと、「備えができていたかどうか？」じゃないでしょうか？ 本当に救われている者たちは、いつ、イエス様が来られても良いように、備えができています。果たして、あなたはいかがでしょうか？

以上、私たちは、クリスチャンが持つべき目線ということについて見てきました…。皆さんも、よく覚えてくださっているかと思いますが、ピリピ 1 章で、パウロは、自分が何も間違ったことはしていないのに、投獄されてもおお…、神様への感謝や平安などを奪われることはありませんでした…。それは、パウロが、今日学んだような…、クリスチャンが持つべき目線というものを、しっかりと持っていたからでもあったのです。

私たちは、いかがでしょうか？ 果たして、皆さんは、神様を模範として、みことばに従ってこうしているようなクリスチャンにこそ、目を留めて…、その模範に倣って生きていこうとしておられるでしょうか？ 自分以上に、霊的に成熟しておられるクリスチャンの方から、何かを吸収しようとしておられるでしょうか？ また、自分自身が、人に影響を与える存在であるということ意識するが故に…、まず、自分がしっかりと成長していかないといけない、というような自覚をお持ちでしょうか？

また、私たちは、地上のことばかりに、心を奪われてしまっていないでしょうか？ 創世記 19 章を見ますと、警告に従わなかったロトの妻は、後ろを振り返ったばかりに、『塩の柱』(創世記 19:26) となってしまったことが教えられていますよね…。私たちが、後ろのものや、この世のものではなく、天や天におられる神様にこそ、目を向けるべきですよね…。

本来なら、滅ぼされて…、永遠の裁きに服すべき私たちに対して、神様は、天での国籍の他に、イエス様との関係や、永遠をイエス様と一緒に過ごすことのできる恵みを与えてくださいました。また、私たちの罪あるからだを、必ず、清められて…、完全に罪から解放される…、栄光のからだに変えられるという恵みも、私たちに与えられている約束です。

ピリピ 1:6 に、『あなたがたのうちに良い働きを始めた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる…』とあるように、神様は、今も、私たちに働きかけてくださっているのです…。だから、私たちは、パウロがそうであったように…、ただ神様を信頼して…、神様を見上げて歩いていくことができます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。